

「観桜会の起源とこれまでの歩み」

※この展示は平成 30 年 3 月 1 日から 4 月 30 日に行われた第 17 回出前展示会を再度展示するものです。

第十三師団の入営と在郷軍人団による桜の植樹

日露戦争中の明治38年(1905) 3月に第十三師団編成の命令が出され、6つの師団から集められた兵は、青森県弘前に集結しました。その後、第十三師団は、樺太・台湾・朝鮮半島に派遣されました。この間、明治40年5月に第十三師団の兵営地が高田に決定し、同年8月から兵営地の土木工事が始まりました。兵舎の建築など、すべての工事が完了したのは明治42年の10月でした。そして、明治41年11月1日に第十三師団の第一陣が高田へ入営しました。

第十三師団が入営した高田には、在郷軍人(予備役・後備役・退役など現役を離れた軍人)を統括する高田連隊区司令部も設置されました。その管轄区域は、長野市・上水内郡・下水内郡・上高井郡・下高井郡・刈羽郡・東頸城郡・中頸城郡・西頸城郡の1市8郡でした。明治41年10月20日、高田連隊区管内の在郷軍人団は、「此地や元是草萊(このちもとこれそうらい 荒れ果てた草地)原野にして園地花木の設あるに非らず…師団入城歓迎を機とし司令部を初め各兵営庭内に樹木植付をなし 蕭條(しゆくじよう ひっそりとし)の光景を一変せんと欲す」と記した趣意書を在郷軍人に届け、募金を開始しました(高田新聞 明治41年10月23日)。翌明治42年4月12日に、同在郷軍人団は、八重・一重の桜の苗木計2,000本を寄付する願書を師団司令部に提出しています(高田新聞 明治42年4月13日)。「認可と同時に近々植栽に着手さるべし／引続き秋季に第二回の寄付をなす由」と高田新聞(明治42年4月13日)に記されており、これが事実だとすると、現在の観桜会のもととなった桜は、明治42年4月以後に植えられたものだといえます。

なお、市営陸上競技場の入り口には、昭和3年(1928)11月15日に竣工した「桜之碑」が建てられています。これは昭和天皇の即位を記念して、在郷軍人会高田市連合分会が建立したもので、川合直次高田市長が碑文をしたためています。碑には、「高田町高城村在郷軍人団相計り郡内僚友の後援を得て桜樹二千二百株を栽ゑ以て其の美観を助く／実に明治四十二年三月なり」と記されています。先に紹介した高田新聞の記事と照らし合わせた時、「郡内」は高田町・高城村のあった中頸城郡のみではなく、高田連隊区司令部の管轄下にあった1市8郡と解釈するのが適当だと思われます。また、桜の植栽時期を明治42年3月としていることについては、高田新聞の報道と異なっており、疑問の余地が残ります。

さて、『高田市史』第1巻によると、在郷軍人団は、桜を次のように配分して兵営地の各所に植えました(数値の単位は本)。

司令部600	歩兵隊285	騎兵隊250	憲兵隊20	憲兵隊分隊20
砲兵隊239	輜重隊282	衛戍病院278	兵器支廠226	計2,200

残念ながら、これらの桜がすべて順調に成長したわけではありません。軍用馬に食べられたり、自然に枯れたりしたものもありました。



高田公園の桜のいわれを伝える「桜之碑」

第十三師団による桜の植樹

これまで在郷軍人団による桜の植樹について述べてきましたが、第十三師団自身も兵営地の整備のために桜を含む各種の樹木を植え、その保護に当りました。師団入営時には高田町の4つの造園業者が、兵営の植樹にかかわりました。その1つの造園業者に伝来した「第十三師団植樹関係資料」(公文書センター所蔵)が残されています。同資料がすべての植樹を網羅しているわけでは

ありませんが、右上の表のとおり、師団は何回かにわたって桜の植樹を行っています。

第十三師団による桜の植樹の経過

No.	年	月	植樹数	資料の種別(植樹場所)
①	不詳		768本	見積書(各兵営)
②	明治42年	4月	90本	請求書(砲兵隊兵営)
③	明治45年	3月	432本	請負書(師団司令部付属地)
④	明治45年	7月	27本	受領証(不明)
⑤	大正元年	11月	30本	受領証(不明)
⑥	大正8年	3月	80本	見積書(不明)

(「第十三師団植樹関係資料」より作成)

①は年月日が記載されていませんが、桜を含め10種類の樹木、総計7,522本(このうち桜は768本)の見積書で、「高田拾参師団各兵営植樹工事」の但し書きがあります。おそらく師団の兵営の工事が行われた明治40年から42年(1907～1909)当時のものだと考えられます。先述のとおり在郷軍人団から桜の寄付が行われたことにより、師団独自の植樹は立ち消えになった可能性もあります。

②から⑥までの植樹数の合計は、659本になります。こちらは請求書・請負書・受領証に記載されたものが大半であり、同数の桜が植樹されたことは間違いなさそうです。このうち③の明治45年3月に師団司令部付属地(かつての市営ソフトボール場付近)へ植樹された432本が群を抜いています。師団司令部付属地には、当時は馬場や干草庫など軍用馬の関連施設が置かれていました。以前に植樹した桜の苗木を軍用馬が捕食したため、これを補うために新たに植樹したのかも知れません。

さて、これらの資料からは、師団により定期的に桜の補植が行われていたこと、桜に限らず兵営内の樹木は毎年11月頃に冬囲いが行われ、大切に管理されていたことも明らかになりました。

師団の桜の花見が高田の名物になるまでの経緯

【師団の桜の観覧の許可】在郷軍人団が第十三師団の兵営内に桜の苗木を植えてから5年後の大正3年(1914)には、花がきれいに咲き誇るようになりました。大正6年になると、師団が偕行社(旧高田城二の丸にあった将校の集会所)の庭内及び司令部構内(第十三師団司令部・歩兵第二十六旅団司令部・高田連隊区司令部があった旧高田城本丸)を開放し、一般市民も花見をできるようになりました。ただし、開放期間は3日間、観覧時間も午前8時から午後4時までと限定されていました(開放期間及び観覧時間は暫時延長、次ページ「ジヤ表「観桜会にかかわる出来事」①参照）。そのほか、「興行物、露店等は外濠以内に入るを許さず／放歌遊戯等は一切厳禁」などの制約があり、「普通のお花見気分を味はう事は絶対に不可能」と高田日報(大正6年4月14日)は伝えています。

ちなみに、大正10年頃までは、高田市民の花見のメッカは寺町通りでした。昭和2年(1927)発行の高田新聞(4月12日)は、「七八年前までは観桜は何といても寺町に限られてゐたのであるがこゝ四五年間にめつきりおとろへ、それに反して城趾の桜がめきめき發育して遂にお株は寺町通りから城趾へと移つてしまつた」と評しています。現在、青田川沿いも花見の名所になっていますが、これは大正天皇・皇后の成婚25周年を記念して、大正14年10月に高田市が植樹(植樹数は230本、400本など諸説あり)したものです。青田川沿いの桜が咲き出したのは、昭和に入ってからのことでした。

【夜桜会の開始】

第一次世界大戦後の政党や世論の軍縮要求と、軍備の近代化の費用を捻出するためにスリム化を図ろうとしていた陸軍の思惑が一致し、大正14年(1925) 5月1日をもって第十三師団は廃止されることになりました(豊橋の第十五師団、岡山の第十七師団、久留米の第十八師団も同時期に廃止)。「師団の花見」が最後となったこの年、高田商工会と高田実業連合会は、司令部通り(本町3丁目三叉路、～高田公園入口)から偕行社までの道路及び偕行社内に広告入りの雪洞(ばんぼり)を灯す計画を立て、両会から委託された高陽俱樂部が運営しました。

前年の大正13年の花見を前に、呉服町(現本町3丁目)の有志は、師団の許可を得て、偕行社の庭内と榊神社前にアーク灯を設置しました。この年から師団の桜の公開期間は10日間になりましたが、アーク灯の設置された偕行社庭内の観覧時間の終了時刻が従来の午後6時から午後12時へ延長されました。したがって、夜桜会の起源は、アーク灯の設置された大正13年ということになります。

【第1回観桜会(花見会)】

第十三師団が廃止された翌年の大正15年(1926)、現在まで続く観桜会(花見会)がスタートしました。この時の主催団体は、高田商工会・高田実業連合会・高田各宗教連合会です。従来と同様に、司令部構内及び偕行社庭内の花見が第十三師団に代わって入営した歩兵第十五旅団司令部から開放されただけでなく、期間中(4月15日～24日)には、次のような多彩な催し物が行われました(高田日報 大正15年4月14日)。

- 名物花見踊・スキー踊…奇数日(ひょうたん池脇特設舞台)
- 郷土芸術民謡大会…偶数日(同上)
- 花祭…18～22日(市内渡御、偕行社)
- 全国優良農具展覧会…15～19日(高田農学校)
- 全国競走大会(オートバイ・自動車・自転車)…18・19日(練兵場)
- 春光会絵画展覧会…13～15日(高田市役所)
- 木工漆工展覧会…17～19日(高田市役所)
- 全市連合花見大売出し…18～20日
- 県社榊神社五十年祭…20・21日
- 農業美術展覧会…15～19日(高田農学校)

観桜会にかかわる主な出来事①(明治～戦前)

和暦 (西暦)	月 日	出 来 事
明治40年 (1907)	5月	第十三師団の兵営地が、高田に決定される。
明治41年 (1908)	10月20日	在郷軍人団が第十三師団の兵営内に植樹するため、在郷軍人を対象に募金を開始する。
同 年	11月 1日	高田町と高城村が合併、新・高田町が発足する。また、同日第十三師団が高田町へ入営を開始する。
明治42年 (1909)	4月12日	在郷軍人団が八重、一重の桜の苗木計2,000本を寄付する願書を第十三師団へ提出する。
明治44年 (1911)	9月 1日	高田市が発足する。
大正 3年 (1914)	4月	第十三師団の兵営内の桜が咲き始める。
大正 6年 (1917)	4月17日 ～19日	第十三師団が、司令部構内及び偕行社庭内の桜の花見を3日間に限り、市民へ開放する。
同 年	12月10日	高田商工会が発足する。
大正11年 (1922)	4月15日 ～18日	師団の桜の公開期間が4日間に、観覧時間も2時間延長され 8:00～18:00 となる。また、偕行社庭内での露店の営業が許可される。
大正12年 (1923)	4月15日 ～19日	師団の桜の公開期間が5日間に延長される。
大正13年 (1924)	4月15日 ～24日	師団の桜の公開期間が10日間に延長される。また、呉服町(現本町3丁目)の有志が、榊神社前と偕行社庭内にアーク灯を設置する(夜桜会の開始)。アーク灯の設置に伴い、偕行社庭内の観覧時間が 8:00～24:00 まで延長される。
大正14年 (1925)	4月15日 ～19日	高田商工会・高田実業連合会が、司令部通りから偕行社までの道路及び偕行社の庭内に雪洞を点灯する。(師団の桜の公開期間は10日間)
同 年	5月 1日	第十三師団が解散する。その後、歩兵第十五旅団司令部、歩兵第三十連隊、独立山砲第一連隊が高田に移転・入営する(高田連隊区司令部は存続)。
大正15年 (1926)	4月	高田商工会が観桜会のポスターを作成し、名古屋鉄道管理局管内の各駅に掲示する。
同 年	4月15日 ～24日	高田商工会・高田実業連合会・高田各宗教連合会が、様々なイベントを盛り込んだ第1回観桜会を開催する。 ※川合直次高田市長が高田の夜桜を長良川の鵜飼、厳島の灯籠と並ぶ「三夜景」の一つと表現する。
昭和 2年 (1927)	7月 8日	高田保勝会が組織され、これ以降高田商工会に代わり観桜会を主催する。
昭和 3年 (1928)	11月 5日	在郷軍人会高田市連合分会が、昭和天皇御大典記念事業として「桜之碑」を建立する。
昭和 4年 (1929)	10月16日	高田商工会が発展解消し高田商工会議所が発足(設立総会開催)。
昭和 8年 (1933)	4月頃	桜植樹25周年を記念し、高田保勝会が偕行社付近から騎兵隊跡地に1,000本を補植する。
昭和12年 (1937)	2月12日	高田保勝会が高田観光協会に改称する。
昭和19年 (1944)	4月	戦局の悪化により観桜会が中止となる。

このほか、観桜会期間中には、旅団関係の招魂祭(19・20日)・独立山砲隊記念祭(18日)・歩兵隊軍旗祭(21日)も実施されました。なお、開始された年代は不明ですが、既にこの年には内堀で貸ボートが営業されています。

さて、第1回観桜会の開催に先立って、高田商工会は観桜会のポスターを作成しました。同商工会は、名古屋・東京・仙台・神戸の各鉄道管理局に対し、所管内各駅にポスター掲示の許可申請を出しています。最終的に、名古屋鉄道管理局のみから許可が下り、静岡、浜松、岐阜、名古屋、大垣、福井、金沢、富山、糸魚川より直江津に至る各駅、篠ノ井・高田間の各駅にポスターが掲示されました。その効果があったかどうかは分かりませんが、第1回観桜会の人出は141,300人であったと高田日報^{大正15年(4月28日)}は伝えています。

【日本三夜景】現在、高田公園の桜は、「日本三大夜桜」と称されています。ほかの2か所は、東京都台東区「上野恩賜公園」と青森県弘前市「弘前公園」を指す場合と、京都市「円山公園」と長崎市「丸山公園」を指す場合があるようです。日本三大夜桜という呼称は、平成14年(2002)の観桜会ポスターから使用されますが、戦前から昭和50年代半ばまでは「日本三夜景」が用いられました。

第1回観桜会が開催された大正15年(1926)、川合直次高田市長は高田日報^{大正15年(4月22日)}に観桜会に関する感想を寄せていますが、その中で「夜桜と言へば直に篝火の祇園を連想するが雪洞の高田は其の規模と言ひ其の環境と言ひ遥に祇園を凌いで居る／長良川の鵜飼^{うかい}(現岐阜県岐阜市)、厳島の灯籠^{いづくしま}(現広島県廿日市市)と先づ日本の三夜景と称して好からう」と述べています。その後、高田の夜桜を全国へアピールする上で、同市長の表現した日本三夜景がたびたび使用されるようになりました。

なお、同日の高田日報には、秦直次第十五旅団長も「高田城内の桜花は全国有数のものであるが不幸未だ多く世上に知られて居ぬ／高田市は一代の文豪を招致して此の絶景を天下に紹介して貰ふが好い」との感想を寄せています。この助言に従う形で、昭和3年(1928)に観桜会を主催していた高田保勝会^{ほしょうかい}は、国民新聞社長徳富蘇峰^{とくふそほう}、文学博士佐佐木^{ささき}信綱^{のりあき}、歌人と謝野晶子^{しやのあきこ}の3氏を招聘する計画を立てましたが^{高田日報 昭和(3年3月8日)}、日程が合わずに立ち消えになってしまいました。

昭和10年の観桜会ポスター



(高田図書館所蔵、原寸は縦113 cm×横55 cm)

戦後から現在までの観桜会の歩み

【観桜会の再開】戦局の悪化に伴い、昭和19年(1944)から観桜会は中止されました。終戦後の昭和20年9月25日から進駐軍(米陸軍歩兵第165連隊、同年12月からは第303野砲大隊が一部入れ代わる)が旧陸軍施設に入営しました。昭和21年2月20日に進駐軍は撤退しますが、観桜会のメイン会場である司令部構内及び偕行社庭内は軍政部(占領政策の履行状況をチェックする機関)の管理下にありました。昭和21年4月、高田観光協会は軍政部の許可をとりつけ、以前と同じように司令部構内及び偕行社庭内を会場にした観桜会を開催しました。観桜会のトップを切って13日から上越一市三郡素人演芸大会が開催されたことが分かりますが、観桜会の会期ははっきりとは分かりません。また、この年には雪洞を点灯した夜桜は行われていません。夜桜が再開された昭和22年の観桜会の主催者は、高田観光協会と昭和21年11月に発足した上越商工会議所(昭和24年に高田商工会議所に改組、昭和48年に直江津商工会議所と合併し上越商工会議所となる)でした。戦後創刊された「文化自由新聞」(昭和22年4月6日)は、この時の主催者の意気込みを「戦時中鳴りを潜めてゐた高田の夜桜を今年は大々的に引き出して各地へ紹介したい」と伝えています。

【高田公園内の施設の整備】観桜会の会場である高田城跡は、昭和25年(1950)11月に高田公園となりますが、昭和29年2月には県指定史跡にもなりました。このため、高田公園内の施設整備は、史跡保存に努めながら進められてきました。観桜会にかかわっては、昭和33年に野外ステージ、昭和37年には厚生会館(上越市発足後は厚生南会館に改称)が、それぞれ観桜会にあわせて竣工し、以後、観桜会行事のメイン会場として利用されました。その後、平成元年(1989)に西堀橋、同5年に高田城三重櫓(やぐら)、同14年には極楽橋が竣工し、観桜会に限らず、高田公園の観光スポットとなっています。さらに、平成29年には高田公園オーレンプラザ(高田公園を象徴する桜と蓮の音読み)が開館しました。

観桜会にかかわる主な出来事②(戦後)

和 暦 (西 暦)	月 日	出 来 事
昭和21年 (1946)	4月	観桜会が再開される。
昭和22年 (1947)	4月15日 ～24日	観桜会の夜桜が復活する。
昭和23年 (1948)	4月	「高田を美しくする会」が発足し、昭和25年から観桜会場内の桜の補植を行う。
昭和25年 (1950)	11月10日	高田城跡が都市計画に基づき、高田公園に指定される。
昭和29年 (1954)	2月10日	高田城跡が県指定史跡になる。
昭和33年 (1958)	4月 2日	高田公園に野外ステージが完成し、落成式が挙行される。
昭和37年 (1962)	4月10日	厚生会館(上越市発足後、厚生南会館に改称)の落成式が挙行される。
昭和43年 (1968)	* * *	日本さくらの会と日本宝くじ協会から桜の苗木千本が寄贈され、高田公園・城山浄水場・春日山に移植される。
昭和44年 (1969)	4月12日 ～21日	この年、NHKで「天と地と」が放映され、会期中約28万人の出入がある。
昭和46年 (1971)	4月29日	高田市と直江津市が合併し、上越市が発足する。
昭和47年 (1972)	4月	第1回ミスさくらコンテストが行われる。(平成8年の第25回で終了)
昭和55年 (1980)	3月 3日	桜(「サクラ」)が「市の木」に制定される。
昭和63年 (1988)	7月20日	北陸自動車道が全区間開通する。
平成 元年 (1989)	4月 1日	西堀橋が竣工し、渡り初めが行われる。
平成 2年 (1990)	* * *	「さくら名所100選」に選ばれる。(日本さくらの会創立25周年事業)
平成 5年 (1993)	4月 2日	高田城三重櫓が復元される。協賛行事として高田藩大名行列が実施される。
平成 8年 (1996)	4月11日 ～29日	初めて100万人の観客を超える115万人が訪れる。(開花が遅れ会期を延長)
平成 9年 (1997)	1月22日	1万本の桜が咲き誇るまちづくり推進委員会が発足する。
同年	3月22日	北越北線(愛称:ほくほく線/犀潟駅・六日町駅)が開業する。
同年	4月5日 ～21日	観桜会の名称を「高田城百万人観桜会」に改称する。
同年	4月13日	第9回さくらサミット in 上越が開催される。
同年	5月17日	高田・直江津の両観光協会を統合し、上越観光コンベンション協会が発足する。
平成10年 (1998)	4月 4日 ～19日	観桜会にあわせて本丸跡に江戸時代の街並みを再現し「越後・高田七十五万石時代まつり」が開催される。
平成11年 (1999)	10月30日	上信越自動車道が全区間開通する。
平成14年 (2002)	4月 3日 ～21日	「日本三大夜桜」のキャッチフレーズが、観桜会のポスターに初めて用いられる。
同年	4月 6日	極楽橋が復元され、渡り初めが行われる。
平成17年 (2005)	4月 2日 ～21日	観桜会80周年。この年から「第〇回」の冠が付けられるようになる。
平成26年 (2014)	3月	「高田公園桜長寿化計画」が策定される。
同年	6月14日	桜プロジェクトJが始動し、第1回目の活動が行われる。
平成27年 (2015)	3月14日	北陸新幹線長野・金沢駅間が営業を開始する。
同年	4月 3日 ～19日	第90回観桜会、過去最高の133万人の出入がある。
平成29年 (2017)	9月29日	市民交流施設「高田公園オーレンプラザ」が開館する。

【観桜会の会期】観桜会の会期は、高田測候所^(大正11年1月10日開所～平成19年9月30日廃止)が出す開花の予想日を参考にして、主催者の協議によって決定されていました。大正15年(1926)の第1回観桜会以来、会期は原則として10日間でしたが、開花の遅れなどから延長されることもありました。昭和59年(1984)の観桜会は、大雪^(三年豪雪の初年)と異常低温により開花^(4月25日)が大幅に遅れたため、当初、4月12日から21日としていた会期を5月6日まで延期しています。当初の会期が大幅に延長されたのは、平成元年(1989)以降です。年によって一定しませんでした。近年は17日間となっています。

【入込数の推移】観桜会の入込数は、昭和46年(1971)の上越市発足以後になってから統計が取られるようになりますが、それ以前については、「広報たかだ」が伝える概数が断片的に残されているだけとなっています。広報たかだによれば、昭和32年は約10万人、NHKで「天と地と」が放映された昭和44年が約28万人、翌45年が約38万人でした。上越市発足以後は、昭和51年に初めて50万人を突破しました。その後は、多少の変動を伴いながら入込数は増加し、平成8年(1996)には100万人を超え、翌9年からは、「高田城百万人観桜会」の名称を用いるようになりました。このように入込数が増加してきた理由としては、会期が延長され多くの人々が訪れる土・日曜日の回数が増えたこと、北陸自動車道^(昭和63年7月)と上信越自動車^(平成11年10月)の全通や北越北線^(ほくほく線／平成9年3月)と北陸新幹線^(平成27年3月)の開業など高速交通網の整備が進んだこと、このほか主催者が観桜会施設の整備とイベントの充実に努めてきたことなどが、功を奏したものと考えられます。

【桜の保護と育成】昭和23年(1948)4月、勤労青年有志20余名により「高田を美しくする会」が結成されました。戦後のすさんだ世相に反して「心とまちを美しく磨く」ことを目的に掲げた同会は、高田公園や寺院の清掃、病院への慰問などの活動を行いました。当時、同会は高田公園内の桜の本数を計測していますが、1,200本ほどに減少していました。この状況を受けて、同会は、市長や市議会議員・学校・町内会などから寄付を募り、昭和25年から29年にかけて、自ら570本を植栽^(ソメイヨシノ500本、八重桜70本)し、また冬囲いなども行いました。



「高田を美しくする会」による補植(昭和26年)

この高田を美しくする会の活動は、その後の桜の植栽と保全活動の先駆けとなりました。

上越市発足から9年目の昭和55年には、桜が「市の木」に指定され、平成2年(1990)には、高田公園が「さくら名所100選」に選ばれています。このような経緯を経て、桜を守り育てていこうという機運が醸成され、市民と行政・関係団体が連携した活動が、続々と生まれました。平成9年には「1万本の桜が咲き誇るまちづくり推進委員会」が組織され、高田公園だけでなく市内全体で桜の木が合計1万本を超えることを目指しました。平成13年4月には、目標達成を記念する植樹が行われています。現在、高田公園の桜は約2,600本となりましたが、上越市では平成26年3月に「高田公園桜長寿化計画」を策定し、計画的な世代更新及び生育の健全化を図ることにしています。同年6月には「桜プロジェクトJ」が始動し、それまで個別に活動してきたボランティア団体や新たに加わった市民が協力して桜の保護・育成活動が行われています。